

## ポーランドの音楽教育

佐藤 允彦

第二次世界大戦が終り、朝鮮動乱を境にして冷戦が二つの世界の間に始まった時、西側の人々は誰しも厚い鉄のカーテンの中に閉じ籠ったロシアにいろいろの憶測の目を向けたものである。そして長い十年の沈黙の後、カーテンの中から打上げられたものは、人工衛星であり、驚異的な科学の結果であった。

然し一方ではその間、ロシアの音楽家の活動に依り、相当な水準を持つロシアの音楽界というものを幾度か認識させられた。時々、われわれの耳にとどいた戦前から有名なS・プロコフィエフ、A・ハチャトゥリアン、Dシヨスタコヴィッチ等の新しい作品は、その作品を通じて教々の話題を投げつけたし、それ等の作曲家の活動とは別に、ロシアが革命後、三十年の間に育てた優れた演奏家に接した時、西側の人々は改めてロシア

音楽界の水準の高さに驚かざるを得なかつた。L・オポーリン、E・ギレリス、D・オイシュトラッフを始め、L・コーガン、I・オイシュトラッフ、R・ファイン、S・リフテル、アシケナーゼ等の名演奏家が、続々と世界に紹介されたことは、スプートニク以上の驚異であつた。

ロシアとは別に、第二次大戦後、社会主義革命に成功したポーランド、チェッコスロヴァキア、ブルガリー、ルーマニア等の東欧諸国も、革命後、その音楽教育の再編成の時、ロシアのものをお手本として組織改造したことは謂うまでもないことである。戦前から東欧は素晴らしい音楽地帯であり、其処には各々独自の歴史と方法があつた。戦後の革命の時も、完全にそれを拭い去ることなく、出来る限り新制度に折込んだといわれてい

る。

その東欧の一国ポーランドも名演奏家を育てるので有名だった。A・ルービンシュタイン、W・マウツジンスキ、J・パデルフスキ、ホフマン、H・シェリング、H・チェルニー・ステファンスカ等の戦前、戦中派を除いても、戦後、世界的な名声を得たAハラシエヴィツチ、A・チャイコフスキ、中国からポーランドに留学し、ショパン・コンクールで入賞以来著名なフ・ツン、ロスヴィエタ・ゲディガ等、数えあげればピアノの王国ポーランドの名にふさわしい観がある。

戦後のポーランドは、社会主義化と同時に音楽教育にも新しい改革の手を加えた。それは前述のように、他の東欧諸国と同様、ロシアのそれをモデルとはしているが、その独自の社会主義と同じく、独自の点が相当ある、と誇りにしているものである。それを段階順にすると次の様になる。

小学校 A、音楽教育に重点を置く。  
B、普通教程に音楽教程を附加。

中学校 A、音楽教育に重点を置く。  
B、普通教程と音楽教程。

大学 A、音楽大学。  
B、総合大学音楽学部。

ポーランドでは、音楽を専門とする為には、右の三つの段階を経るようになってゐる。小学校、中学校の教程は、いずれも

A、Bの二つあり、中学進学の時、A・B以外の普通小学校卒業では音楽中学を受験することは出来ない仕組みになっている。それは大学受験の時も同様である。

小学校の場合、普通初等教育の学校と区別して音楽小学校と呼ばれる二種がある。Aのタイプの学校は徹底した音楽重点教育と言っても差支えないだろう。子供の音楽学校といった風で、音楽に必要な初歩的知識は此処に居る間に植えつけられる。簡単な音楽史、理論、和声、楽式論に至る迄、学科としてあり、特にソルフェージュと聴音は最も基本的な学科として重視され、その他に各楽器を勉強するようになってゐる。面白いことは、特定の一楽器に教育の主眼を向けるのではなく、様々の楽器と仲良くさせるのが目的だ、と言っていることだ。例えば、ピアノの上手い子供でもピアノばかり弾かずにヴァイオリンもチェロも触らせてみる。そして、この教育の間に、本当に自分の好きな楽器を発見させる動機を与える訳である。Bのタイプの学校は、Aに比較するとそれ程徹底してはいない。普通教育の放課後に音楽教育をするもので、その点日本の子供の音楽教室に似ているとも言えよう。然し、その音楽教育は毎日の放課後のことだから、相当時間をかけてしているとも言える。

Aタイプの音楽学校を見学した時、その徹底した教育に驚いたことがある。例えばオーケストラ練習の時等も、楽器の持変えをさせているし、リズム・テンポ・アンサンブルといった言葉

の意味を出来るだけ具体的に体験させて掴ませようと試みていた。又、或るヴァイオリンのレッスンを見た時、生徒一人に二人の先生が居り、演奏だけでなく、解釈、アナリゼに至る迄いろいろの助言を与えている光景に驚かされてしまった。細かい演奏上のテクニククの注意は勿論のこと、伴奏部との和声の関係を話したり、実に入念に教えているのには驚くより他なかった。こうした基礎教育をしていれば、専門的な道を進んでも何を理解し得る能力をつけさせことになり、その上いろいろな楽器に親しみ、その特質の一端でも擷んでおけば、後日変声や何か不慮の事故が生じた場合でも、全く音楽から離れてしまうことなく、異った楽器に向うことも容易であろうし、後に作曲を志しても、仕事し易いということにもなる。子供にとっては、或は難しい七面倒なことかも知れないが、非常に良い教育だと思われる。

このA・Bいずれかの教程を修了したものが次の中学に進学する資格を持つことは前述の通りである。上級の中学では、各専門コースに進むことになり、その場合の専攻が問題になってくる。子供の場合、何が一番適当な楽器であるか決定するのは非常に難しい。この為、中学進学の時、小学校の中に判定会が出来、そこで本人の希望する専攻、学校側の判定、親の希望の三つを種々の面から検討して進学への指針にしている。勿論、本人の希望が最も重要であり、これを中心として判断している。

るそうであるが、一般的に三つが一致することの方が多いそうである。

中学の課程は各専門に分けられている。Aのタイプは、完全な大学教育を受ける為の基礎講座となり、音楽関係の講座の数も一段と増え、高度になっている。又、一般教養の面でも人間形成の上で此の年令が一番大事な年頃である点を重視して普通教育以上の相当なつめ込み教育が行われている。専門とする楽器も此の段階では基礎教育を重視して、テクニク習得をさせるのが一番の目的であるようだった。例えばハノンを自由に移動して弾かせようと試みたり、連続的に古典を弾かせたりしていたのが目についた。

中学のBタイプの課程を受けるものは非常に多い、それは、音楽コースにも進学出来るし、一般大学にも進学出来るという好条件に由るものであろうが、このコースで或る程度以上の音楽教育を受け、例へ他の方面に進んでも結果的には良き音楽ディレタントの増加を意味し、音楽社会の層の厚味を増すものとして歓迎されることになる。

大学の課程は、何処の国も同じである。唯問題となるのは、如何に持てるものを引き出し、開花させるかという教育者の方の問題になるだろう。幸いにしてポーランドには、他の東欧圏、西欧圏にみられない程の良師が沢山ある。Z・ジニヴィエツキ、H・シュトゥムプカ、J・エキエル、M・カゾロ等ピアノ

の先生として世界的な名師が居り、恵まれた状態だといえる。これ等の人達が全国七つの音楽大学に講座を持ち、素晴らしい若手を育てる原動力となっている。その教育方法は実に厳しい。学期末の試験も、楽にリサイタルが出来る程のプログラムを与えられ、一日三、四人きり受験出来ない程時間を要する厳しさである。音楽大学での講座は割合に数が少ない。最終的な仕上げをする講座だけでも言えよう。そして、それ以上に研究したい者は総合大学にある音楽の講座で自由に聴講出来るし、一方総合大学の学生で実技を習いたい者は、音楽大学で自由に受けられる、といった交換教育の形態がとられていることも、非常に良い方法だと感心させられた。

この三段階の学校教育を受けるには、勿論、入学試験という難関があることは日本と同様である。専門としようとする人口が多いだけに、その競争は烈しいものである。然し、この点、ただ試験に難問題を並べて受験者を選択するといった方法ではなく、この入学試験は実に良く出来ていた。その最初の試験である小学校の場合、その試験期間を一週間とり入念にテストする訳である。然も各科目について二度のテストを行い、一度目のテストで失敗しても二度目にもう一度の機会を与えるという実に平等な試験方法を採用しているのである。又、ポーランドの場合面白いことは、入学試験の一つである体格検査と同時に、果手の骨格のレントゲン写真をとり、骨格の発育状態をみて、果

して音楽家になり得るか否かの参考にしていうことである。これを実施している以上、それに対する賛否は別として音楽骨格学とでも名付けられるような医学上の一分野が既に展開していると見られる。然し、この親切な入学試験も小学校の場合合だけであり、中等、大学の場合は実技のみ二度行ない、学科は一度という普通の態度をとっていた。

以上のようなポーランドの音楽教育をわれわれは参考に出来ても、社会構造の違う以上、望むことは出来ない。ポーランドには参考にすべきいろいろの特徴は沢山ある。その中でわれわれと比較出来るのは、初期教育であろう。わが国でも近年殊に幼時教育の必要が云々されているが、ポーランドでは戦前から相当盛んに行われ、その歴史の中から現在の方法が生れて来たのである。そして一番問題とされているのは親の熱意であり、厳しさであることは何処も同じである。然し、その厳しさも、もつと嚴格に練習させる様に要求するのは教師の方である。そして実技の練習だけでなく、基礎的な楽理をどしどし吸収させることを試みているのも良いことであろう。われわれの場合、以上のような三つの組織的段階もなく、従って当然与えるべき音楽教養を与える時間すらないが、ポーランドのそれを見る時、そこに反省の材料があり、又今後への一つの指針とみられるものが多いように思える。

(本学講師音楽史)